
1 1 . あまのじゃく

フランシス・ローレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

11．あまのじゃく

【Nコード】

N4015T

【作者名】

フランスス・ローレライ

【あらすじ】

ウィーンに帰ってきたイサムの前に、ギリシャで出会ったスピロス老人が登場。

イサムがウィーンに戻ったのは、9月の初めだった。

そこで彼を感じ取ったのは、まさに夏の終わりである。土地っ子の快活さがなくなり、気むずかしくも閉鎖的な、古都の雰囲気に戻っていた。

彼は出張して以来、髪が長くなり、体重が増えている。

近頃、秋の風物詩の焼き栗が、^{マローニ}駅前^{マローニ}の露店に出ていた。ウィーンっ子たちは、新聞紙の袋で手を温めるため、カイロ替わりに買っていくのだ。

しばらくすると不意に、マミから郵便小包が届いた。開けてみると、栗の入った和菓子だった。

二人の仲は、すっかり冷え込んだと思っていたので、彼にはとても意外に思えた。

早速、昼食後に2、3個口に入れ、彼女に御礼の電話を試みたが、誰も応答しなかった。

.....

「グリユス・ゴット！」と、どこからともなく声がかかった。聞いたことのある、低くて深い声だ。

「誰だ?!」

「お久しぶりだね」と、うなるような声がする。

後ろを振り返ると、体格の良い大男がいる。鷲鼻の上に、サングラス。

どこかで見た覚えがある……そう言えば、デロス島で俺たちを案内してくれた、ガイドのスピロス老人にそっくり!

「あ、どうも。お久しぶり……それにしても……」と、俺は驚きの

反応。

「ワシを、覚えていてくれたかい？」

彼の声は、まるで古いアナログ・レコードを遅すぎる回転数で聞くように低く、ゆっくりとしている。どういう訳か、今日は日本語だ。

「えっ？ まあ、もちろん」

ここは、シユテファン寺院に面した広場のカフェ「アイーダ」。言わずと知れた観光客に混じり、土地の若ぶった叔母さんやらタバコの煙にまみれた叔父さんたちが、広場の大道芸人を眺めながら思い思いにくつろいでいる。

ジャグラーが、道化師の赤白の派手な衣装で、ボウリングのピンを何本も空中に放り投げては、落ちてくる順に次々とまた放り投げる。

俺もその連中に混じり、白ワインを飲みながら鋭気を養っている。マミとの思い出がこみあげ、涙があふれそうだ。彼女を初めて見かけたコンサート……初めて声をかけた時のこと……そして……

「Who drinks, wins！」

チリで会議の誘致合戦をやっていた時、誰かが酔っ払って、叫んでいたっけ。

「だからキリスト教徒は、トルコ軍に勝てたんだよ……ワインを飲んだから……」と、スピロス老人が続ける。

「ヘアー・スピロス、どうして、ウィーンに？」と尋ねてみた。

「シッ！ 声をあげるな」

さすがの俺も、周りが気になり始めた。

落ち着け、あせるな、と自分に言い続ける。

確かに、目の前のスピロス老人は顔が青白いのみならず、浮薄でリアルでない。ガイドの彼が幽霊だと言う噂は、本当だろうか。

「フロイトを知っているかい、ウィーンっ子の？」と、彼が口走る。
「何ですか、突然？」

「少し、外で話をしようか」と、声の主が少し乱暴に言った。

「土地つ子に見られてもしょうがないからな」とつぶやきながら、俺はアイーダを出る。スピロス老人がついてくる。

デロス島の恩返しなのか。今日は、俺がガイド。

店を出ると、日差しが結構きつい。

観光客であふれかえるケルントナー通りを下っていく。

すると右側に、超絶的に大きなガラス窓。大きなシャンデリアをはじめ、ガラス工芸で有名な、ロブマイヤーの店だ。ここは、キラキラ光る美の世界。

「ぼやぼやしないで！」と、スピロスが声高に言う。

仕方なく、通りに戻った。そして道をさらに下っていく。

スピロス老人の様子がおかしい。デロス島の道案内では、ないかも知れない。

古今東西、お化けや幽霊伝説のない土地は……ない。日本では、ろくろつ首や傘のお化け……西洋には、妖精……ウィーンには、精神分析のフロイト博士を翻弄した奴が、出るに違いない。

「イサムウー！ お前は少し、軽薄だったな……」と、スピロス老人の低い声が響き渡る。

「からかうなよ！」と、俺は思わず言ってやった。

「お前の潜在意識は鬱屈しているんだ、たくさん情報を抱えながら」と言いながら、スピロス老人が突然、サングラスを取る。

隠れていた左の義眼が、ギリリと光った。

「だから解放されたがっているんだ、ありとあらゆる手段を使って……」と、彼が得意そうに続ける。

俺は驚愕しながら、道を歩きはじめた。すると、

「潜在意識は、あまのじゃくな性格で、意識に常に反対する。『X』を主張すると、すぐに『反X』を主張するんだ」との有難い解説。

こいつは、俺をかつごうとしているに違いない。大体、この土地の人間の言うことなんか、ゴルフのスコアのように……気をつけていないと、時々すごくいい加減だ。

「どうして、突然出てきたんだ？　今までどこにいた？　帰ってくれよ！　デロス島に戻りやがれ！」と、叫んだ。

その途端に額に激痛が走った。そこを手で押さえながら、驚愕した。

血だ！

「津軽マミは、嫉妬に狂っているんだ」

「え？」

「彼女の怨念を、晴らしてやれ！」と、そいつが叫ぶ。

「どうやって？」

「手始めに、謝ったらどうだ？」

「それは……」と言う俺は、すっかり動揺している。

「音楽やるんだよな、お前？」

「はい……」と答える俺は、恐怖におののいている。

「ワシは、そう言うアホに弱いんだよ、『音楽の都』で真面目に追求しようとする奴。そんなのに限って、音楽も、女心も分からない。

さあ、ベルヴェデーレ宮殿まで行こうじゃないか！　ポーランド国王がトルコ軍に突撃をしかけた、カーレンベルグの丘がよく見えるんだ！」と、そいつがヒステリカルに叫び、ケラケラ笑う。

俺は何のことだか分からないまま、まるで催眠術にかかったように、素直に宮殿に向かった。

ベルヴェデーレ宮殿は、オイゲン公の夏の離宮だった。数々の戦勝により手に入れたが、娘の代に、女帝マリア・テレジアの手に渡ったらしい。

ゲートから入ると、左右対称の立派な宮殿と、巨大な鏡のような池を中央に配した、広大な中庭が現れる。その向こうには、背の低い、もう一つの瀟洒な建物。

全て高い塀に囲まれた、秘密の花園ならぬ、秘密の宮殿だ。バロック様式の宮殿の広い玄関の両側には、神話上の動物「スフィンクス」が門番している。

体は鷲のような翼のあるライオンで、頭は美しい女性。エジプトのピラミッドを守っている奴と、そっくりだ。

そいつが突然眼をむき、ハスキーな女の声で叫んだ。

「浮気者のイサムね！ 通行条件の問題を出すから、解きなさい。鷲とライオンが合わせて20匹、足が合計58本！ 鷲とライオンの数は？」

「勘弁して下さい！ 何のつもりで？」

「これを解きなさい。でないと、三途の川よ！」

昔、予備校でやらされたような問題だと思いつつ、俺は途方に暮れた。

そこでスピロスの野郎が、口を挟んだ。

「イサム、ライオンを2つに切り離して考える。デロス島にも、半分崩れた奴とか、いたよなあ？」

「えッ？」

「ライオンを、ライとオンに切り離すんだ。ライは頭の部分で、たてがみに前足2本。オンは残りで、背中から後ろ足2本そして尻尾。すると58本は、鷲、ライ、オンの足の総数だよ！」

「難しい！」

「これを2分割。すると、みんな2本足だから、3種類で何匹だか分かるんだ」

「すると、29匹？」

「そうだ。そこから20匹を引いた9匹、9頭が、ライオンの数だ」「何故？」と、俺はついつい聞いてしまう。

すると、スピロスがこう耳うち。

「ライ、オン、そしてライオンの数は、常に一致する。だから鷲、ライ、オンで29匹なら、ライオンの数は二重勘定」

そこで俺は気を取り直し、スフィンクスに今の答えを出してやった。

「ライオンは9頭で、鷲は11羽！」

するとスフィンクスは満足げに笑みを浮かべ、穏やかな表情に戻

った。

そしてあたりは静まりかえった。

良かった！

一呼吸おいて、スピロスが言った。

「良かったなあ、イサム、うまく解けて！　と言っか、今の答えの9と11から、歴史を振り返るうじやないの。ウィーンがトルコ軍に包囲されたら、ポーランド国王が助けに来たけど、いつだっけ？」

「確か、1683年。何で？」

「その日付が、9月11日。その後オイゲン公が、セルビアのゼンタでトルコ軍を蹴散らしたが、いつだった？」と、スピロスが更に問うて来る。

「確か、1697年」

「ところが、やっぱり9月11日だったんだよ！　イサム、ワシはなあ、津軽マミの遣いだ。メッセンジャーだ！」と、ただならぬ深い声でエコーが響き渡る。

「ニューヨークで、何があったんだあー？」

「待ってくれ、誘惑されたんだ！」

「嘘つけ！」

「俺のせいじゃ、ない！」

「素直になったら、どうなんだ？」と、そいつが詰め寄る。

「正直、チリで負けて……」

「それで？」と言う奴の声は、少しゆっくりとしたトーンになる。

「フェリーに酔ったんだ、本当に。藤江良子は、ほんの……」

「やっぱり！　マミの嫉妬は恐ろしいぞ、覚えておけ！　ところで9月11日、つまり明後日、ニューヨークの世界貿易センターが、危ないらしいんだ……」

「えっ？」

藤江良子の職場じゃないか！

「9月11日、ツインタワー・ビルだ！」と、そいつが繰り返した。
「何故だ？　その根拠は？」

「お前、映画の『インデペンデンス・デイ』、知ってるか？ ちょっと怖いよなあ……真似する奴が、いるかも知れない！」

「どういう意味だ？」と、聞いてやった。

「建物が、木端微塵だ！」

「嘘だ！」

「信じるかどうかは、お前次第だな……」

「……分かった、藤江良子に伝えよう……だから、もう消えてくれ！」

「いやいや、ワシは潜在意識のような、天性のあまのじゃくなの！ そんな態度じゃあ、だめ！」

そこで、さすがの俺も、ひらめいてしまった。

正反対を、言ってやろうじゃないか！

「それじゃあ、ずっと俺をいじめてくれ、頼む！」

するとそいつの姿が、魔法をかけられたように、ふっと消えてしまった。

そしてイサムは目を覚ました。

何と、ベルヴェデーレ宮殿の中庭のベンチの上で、居眠り。

陽が沈もうとしており、あたりは薄暗い。

向こう側に、宮殿の低い方の建物が見える。そしてシュテファン寺院の尖塔も。顔をあげると、遠くの方が明るく、カーレンベルグのずんぐりとした丘がぼんやり見える。

頭が重い。しかも、冷や汗をかいている。

額の汗をぬぐうと、その色が赤かった。

血だ！ 幽霊は、本当に出たんだ……！！

「こわい」と思いながら、イサムは震えていた。

時計を見ると4時半だった。背広の上にコートを着ているが、すっかり冷え込んでいる。

「ああ、畜生！ 南米出張のおかげで、ほんまに惨め！」

彼はその場で、2回立て続けにクシャミ。そして鼻をすすりなが

ら、顔を上げた。

すると、宮殿を守るスフィックスの彫像が、ニヤリと笑っていた。そこから漂う、ただならぬ妖気！

ゾーッと、鳥肌が立つ。

金縛りのように、身体が言うことを聞かない。

その時だった！ 西の方に、明るい夕焼けが見えた。

彼はワラをも掴む気持ちで、夕陽に向かって叫んだ、「助けて、助けて…… 助けてくれ！」と。

すると暖かな光線が、じわじわと体に浸透し、次第にしだいに解放されていく。

「やれやれ、ひどい目に遭ったもんだ！」

イサムは、ほうほうの体でアパートに戻った。

そして洗面所の鏡で、額にできたはずの傷を搜したが、どうしても見つからない。

「チエツ。最初から最後まで、夢か！」

彼はいたたまれず、萩谷に電話を入れた。

「アロ？」

「おい、萩谷！ 夢に、幽霊が出たんだ！」

「えっ？」

「ベルヴェデーレ宮殿で居眠りしたら、スピロスが出てきて、明後日の9月11日、ニューヨークの世界貿易センターに近づくなんて……」と、イサムが切々と訴える。

「スピロスって？」

「ミコノス島のガイド！」

「……なるほど」

「生きた心地しなかった！ しまいには、つる亀算……しかも、津軽マミの遣いだって……」

「分かった。今すぐ、話を聞きに行くよ」と言いながら、萩谷が電話を切った。

そこで彼は、藤江良子にメールした。

「ニューヨークでは、大変お世話になりました。改めてどうも有難う。」

ところで変な話だけど、こちらの情報では、明後日の9月11日、創銀のオフィスのある世界貿易センターで何か、とんでもないことが起きるらしい。映画『インデペンデンス・デイ』の乗りらしいんだ。頼むから、その日はツインタワー・ビルから、ずっと離れていて欲しい。何も起きなかった場合には、こちらの高級ワインケース送るので、どうぞ宜しく。イサム」

シヨック冷めやらぬイサムのところに、萩谷がやってきた。

イサムが悪夢をひとしきり説明したところで、萩谷は名探偵シャーロック・ホームズのように、分析し始めた。

「大変だったなあ、お前。そうだなあ……幽霊がママに呼び出された、と繰り返したのは多分、ママが演出したから……彼女はほとんど、魔法使いだね！」と言う萩谷は、確信に満ちていた。

「そいつ、9月11日には決して、ニューヨークの世界貿易センターに近づくなと……」と、イサムが訴える。

「へえ、何が起きるんだろう？ 夢の前に、酒、飲んでなかった？」と、萩谷が追求し始める。

「昼めし時に、白ワインを少し」と、イサムが答える。

「やっぱり！ それで、昼めしのメニューは？」と、萩谷が問うてくる。

「確か、ポルチー二茸と御飯を混ぜて……」

「キノコ？」

「青果市場で見つけたんだ」と、イサムが野暮ったく答える。

「本当に、ポルチー二だろうな？」

「香りも、間違いなく……何故？」と、イサムが怪訝そうに尋ねる。

「最近、マジック・マッシュルームが社会問題で……」

「何だそれ？」

「中南米のシャーマンが使うキノコでね……無味無臭の幻覚剤」と、萩谷が優等生ぶって言った。そして、

「……トランス状態を誘発するらしいんだ……要するに、潜在意識を呼び覚ましてしまふ。あとは、何食った？」と続けた。

「ソーセージ。それに、マミから送ってきた生菓子」

「おっと、それは初耳！ 彼女は、怒ってるんでないの？」

「お裾分けだと思っただけだね……」

「それ、どんな味だった？」と、萩谷が詰め寄る。

「何の変哲もない、栗の和菓子だけどね……」と、イサムが思い出しながら答える。

「その和菓子だ！ そこに仕込んであった、けしからん有効成分が潜在意識を呼び覚まし、それが幽霊を夢に登場させた、と言っ連鎖だろう。どう考えても彼女とは、別れたほうが良いね」と、萩谷が真剣な表情で、自説を展開した。

「……結論を急がないで欲しいね」とイサムが、少し苦しそうに彼をけん制する。

「いやあ、そのうち殺されるぞ！ きつと彼女は就職して、考え方が変わったんだよ。ニューヨーク出張で激した途端、潜伏中の魔物が現われて……何で今頃、食べ物の差し入れだと思う？」と問いかける萩谷は、あくまで冷やかだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4015t/>

11 . あまのじゃく

2011年7月14日03時28分発行